

●●●● S-KYT（消防団危険予知訓練）研修を実施して ●●●●

佐賀県伊万里市消防団



伊万里湾大橋



カブトガニ

1 はじめに

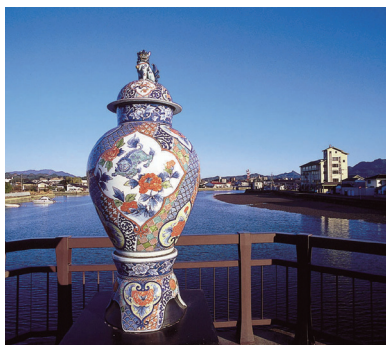
伊万里市は、北部九州の西部に位置し、天然の良港伊万里湾を抱く人口約6万人、面積255.02km²の市域を有しています。江戸時代には焼物の積出港として栄え、「イマリ」の名が世界に広まりました。

また、石炭産業全盛期は石炭の積出港として栄え、近年では伊万里湾総合開発を軸に大規模な臨海工業団地を造成し、造船、IC関連産業、木材加工業等の集積により近代的な工業港として発展しており、さらに大型化するコンテナ船に対応する岸壁整備が進められています。成長著しい東アジア諸国との至近性から高い潜在力を有する伊万里港については、一昨年の重点港湾に続き昨年11月には日本海側拠点港にも選定され、国による今後の集中投資が期待されます。

特産品として、鍋島藩窯300有余年の歴史と伝統を誇る伊万里焼をはじめ、伊万里梨、伊万里牛が全国的に有名です。窯業・農業のほかIC関連産業や、造船・自動車部品の製造等が産業の基幹的役割を担っており、伝統産業と先端技術とが融和した特色ある都市づくりを目指しています。

2 伊万里市消防団の概要

伊万里市消防団は、昭和29年4月に伊万里市制発足とともに旧2町7ヶ村の消防団を統合し、12個分団、定員3,200名で組織が再編されました。その後、昭和45年消防団統合整備計画に着手、昭和50年に統合整備計画が完了し、12個分団、76部、定員1,200名となりました。現在は、12個分団、72部、定員1,020名の団員が活動している一方では、市街地における団地化や中山間



古伊万里壺伊万里津大橋壺



伊万里梨



伊万里牛

地の過疎化など、地域形態の変化に伴う組織の新たな統合・再編の動きもはじまっています。

広い市域を有する本市では、各種災害に迅速かつ的確に対応するため小型動力ポンプ付積載車68台と小型動力ポンプ4台を配備し火災をはじめ、あらゆる災害や広報・警戒活動等に力を発揮しています。

また、平成3年には佐賀県初となる女性消防団員が誕生し、応急手当指導員の資格を取得し事業所や各種団体への応急手当指導や、一人暮らし高齢者宅へ訪問し火災予防を呼びかけるなど、女性特有のソフト面を活かした消防団活動を行っています。

3 S-KYT研修を実施した経緯

伊万里市は過去に、大規模な地滑りや集中豪雨などによる甚大な被害に遭い、多くの人命を失う災害を経験してきました。近年においても、集中



豪雨による土砂崩れや遭難などによって、人命救助を伴う消防団活動に従事する事案が発生しています。

このような災害経験を踏まえ、平成19年には建設業界などと連携した活動を有効にするために、「消防団協力事業所」制度を発足させ、民間力を活かした初動体制の強化を図っています。

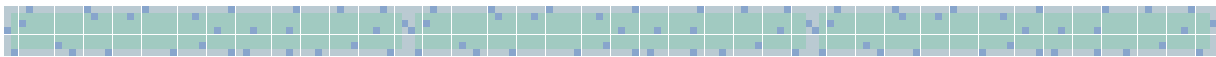
また、国が推進する「総務省消防庁消防団協力事業所」は、全国第1号として自動車部品会社が認定を受けており、これを契機に市内の各事業所においても消防団活動への理解度は年々高まりをみせ、消防団組織の強化につながっています。

一方、消防団員自身も各種訓練を通し災害対応能力の研鑽に努めるとともに、危機管理能力の向上と団員個々の公務災害に対する知識の習得を狙い、平成22年に消防団員等公務災害補償等共済基金の事業協力を得てS-KYT研修に取り組み、県内市町における単独開催は初めてとなり、参加した幹部団員の反響は絶大で、個々のスキルと組織のレベルアップに大きな効果があり、これまで3回の開催で参加した団員181名を数え、重要な研修の一環となっています。

4 S-KYT研修を実施して

S-KYT研修は、団員それぞれが現場経験の中で培った危機管理を共有し実践していくことは勿論、危険に対する感受性や作業の集中力を高め、そのプロセスの中で実践活動への意気込みや積極的なチーム風土を作るという実に有意義な研修となりました。本研修の開催にあたっては、遠路伊万里まで足をお運びいただいた指導員の方々も懇切丁寧な説明に加え、団員の意見や発言に対し熱心に回答していただきました。

参加者からは、「指さし呼称等は会社でも行っていますが、ここまで本格的ではなかったので大



合いの中でコミュニケーションが取れ、研修終了時には充実感とともに明るい表情が見て取れました。

5 今後の取り組みについて

安全安心なまちづくりには、災害時にいち早く駆けつけ、被害を最小限に止める消防団員の存在が欠かせません。「一人ひとりかけがえのない団員」という公務災害防止活動の理念に基づき、S-KYTを各分団や各部で実践し、今後の安全、確実な現場活動に役立てていきたいと考えています。



変勉強になり消防活動のみならず職場でも活かしたいと思います。」「危険について、頭の中で考えていることを言葉に出して検討することで、危険予知とその対策が具体的に考えられるようになりました。」「今日学んだことを、今後の消防団活動に活かすとともに、部下団員の指導育成に努めたいと思います。」など、多くの意見が寄せられました。

開催の挨拶時に表情の堅かった団員も、研修が進むにつれ各班員との危険に対する積極的な話し



「伊万里市消防団 ゼロ災でいこう！」

「ヨシ！」